

二〇二〇年春、新型コロナウイルス感染症の拡大とともに、世界の多くの都市でロックダウンが行われた。日本の都市では、諸外国のようなレベルでのロックダウンこそ行われなかったが、緊急事態宣言という名のもと、外出自粛の要請が出された。人がいなくなり、閑散とした都市の風景は、私たちがはじめて見る光景だった。

『ガーディアン』紙で世界の都市のロックダウン風景が掲載されているのを見て、ふと十九世紀ポスト印象派を代表するジョルジュ・スーラの絵を思い出した。《風景、グラランド・ジャット島》（一八八四年、個人蔵）である（図1）。島には人気がなく、おだやかな日差しに照らされた静かな光景だけが広がる。目を凝らせば、セーヌ川にはボートが、また遠景に白い犬が一匹見えるが、ほぼ誰もいない。画家は白黒だけのデッサンでも同様に、人の気配のない空虚な同様の景色を捉えている。スーラはこの風景に、四十名ほどの人々を登場させて、名高い《グラランド・ジャット島の日曜日の午後》（一八八四―八六年、シカゴ・アート・インスティテュート蔵）（図2）を一八八六年に完成・発表した。木彫のように動きのないこわばった人物たちと、淡々と機械的に置かれた点描が当時、批評家たちから揶揄された。



図2 スーラ《グランド・ジャット島の日曜日の午後》1884-86年、207.5 x 308.1 cm、シカゴ・アート・インスティテュート蔵

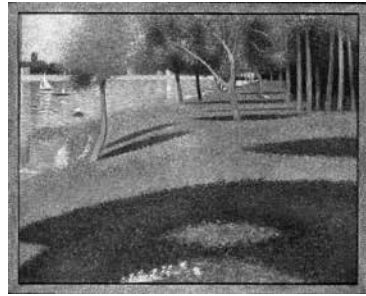


図1 スーラ《風景、グランド・ジャット島》1884年、縁取り1888-89年、64.7 x 81.2 cm、個人蔵

ところで、スーラは大作を完成させたあとの一八八八年から八九年にかけて、最初に描いた風景だけの習作に手を加えている。カンヴァスの周囲を点描で縁取り、さらには、同じく点描で装飾された額縁をつくり、この絵に取り付けたのである。なぜ画家は、人のいない空虚な風景を、点描装飾を付け加えることによってただの「習作」から完成した「風景画」へと変容させたのだろうか。

これまでこの作品を見ると、画家は、人のいない舞台に人を登場させて、完成した風景にしたというプロセスだけを見ていた。ところが、今となって見れば、「人のいない舞台」から「人々にぎわう日曜日の風景」へとという行程までではなく、そこから、「人の消えた風景」までが射程として見えてくるようになった。

人間がいなくなったロックダウン中の都市光景は、この作品を新たな視点で眺める機会を与えてくれたのである。アメリカの美術史家リンダ・ノックリンは、ブロッホの著作を引用しながら《グランド・ジャット島の日曜日の午後》に反ユートピアの要素を見出しているが（リンダ・ノックリン『絵画の政治学』ちくま学芸文庫、二〇二一年、三三〇頁）、スーラがもともと人間が登場する舞台として構想したのは「習作」が、のちに人間が消え去った「風景画」として完成されたのは、まさに、反ユートピアが現実になった景色を描いているようにも思われてこよう。実際、よく見れば、スーラの《グランド・ジャット島の日曜日

の午後》ほど、ソーシャル・ディスタンスを捉えている作例も少ない。人々はもちろん、ここでは衛生的な理由から距離を保っているのではないのだが。

本作が描かれたのは十九世紀後半。パリが本格的に近代都市となりはじめた時代である。画家はすでに都市の危機を予兆していたのだろうか。

*

本書は、都市に関し、多様な専門と視点から寄せられた論考を集めたものである。ここでは「美術」や「アート」が考察の核としてあるが、より広く文化や社会を起点とした考察も含められる。

論稿の執筆者は、早稲田大学総合研究機構のプロジェクト研究所「都市と美術研究所」の研究員を中心に、招聘研究員および、これまで開催されてきた研究会やシンポジウムにおけるゲストスピーカーにより構成されている。

「都市と美術研究所」は名前のとおり、二〇一六年の設立以来「都市」と「美術」をキーワードに、分野を限定することなく、これらについて幅広い視点から考察を重ねてきた。活動の詳細については以下のホームページを参照されたい (<http://w3.waseda.jp/pj-cityandart/>)。研究所にこれまで関わってきたメンバーは、建築、土木、都市計画、社会学、美術史、文学、思想など、理系から文系まで、さまざまな専門を基盤としている。

そのため、ここでは都市をめぐる、各分野から課題の提示や考察が多角的になされてきたが、とはいえ、何らかの統一的問題の解決を目指したものではない。あえてその目的を示すなら、都市の危機や再生、過去や未来について、多様な問題を示し、浮彫りにすることで、危機を乗り越えるためのヒントを見出そうとするところにある。

以下、本書に収録されている各論考について、興味深い点を簡単に紹介しておく。

第一部「危機の時代と都市、構想と未来」は以下の論考で構成される。

長田攻一氏による「『危機の時代』における日本の都市」は、大震災、コロナ、集中豪雨など、危機をきっかけに顕著になった現代日本の姿を鋭くあぶり出したもので、本論集の根幹的課題を提出する。筆者の指摘によれば、日本の都市において人々は、災害時の防災問題をはじめ、多くの問題をもっぱら行政の仕事と考える傾向にある。たとえば、排ガスによる大気汚染問題については、道路沿いの住民でもなければ関心を持ってこなかった。こうした「行政依存」、「私生活主義」、「政治的無関心」が、現代の日本社会における「都市の脆弱性」を生み出したのだとされる。その対応として提案されるのは持続可能な「環世界」という新たな都市システムの再編である。

大石久和氏もまた「都市の未来と道路——空間とネットワーク」において、大災害や少子高齢化がもたらす課題を、現代日本のまさに「国難」として強く訴える。こうした状況から日本を守りえる最大にして唯一の手段は、東京首都圏一極集中の解消であると提唱する。それには日本全国にわたって特色ある都市の創成が必要であり、魅力ある各都市をつなぐための高速インフラネットワークの重要性が浮かび上がってくる。ここでは「国土学」の提唱者である筆者独自の視点から、これらが論じられている。

マチウ・ベルジェ氏とジョフレ・グリュロワ氏による「ポストCOVID都市のための社会インフラとは何か？」は欧州基金により開催された都市問題研究のための学際ラボにおける成果をまとめたものだ。ヨーロッパの中心地に位置するブリュッセルの主要な二大学で教鞭をとる研究者たちが訴えるのは、ポストコロナ時代の都市では、「室内性を伴う公共空間（パブリック・インテリア）」とされる諸施設の重要性である。すなわちショッピング・センター、空港、ミュージアムなどが、その機能性を超え、くつろぎやホスピタリティ、幸福の経験を

人々に提供する、重要な空間となりえることが示されている。

同じくブリュッセルを拠点とする研究者クレール・ペルグリムズ氏の「ブリュッセルの自転車専用交通網の発展に対するCOVID-19のインパクト——戦術的都市計画と美的経験」は、交通インフラについて、今までの機能主義的なレベルからシフトした別のレベルの新たな可能性を示唆する。コロナ禍においてブリュッセルでは、かつてより望まれていた自転車専用道路の設置が期せずして現実になったものの、そこで発見されたのは、従来の自転車専用道の不十分さだ。これまでの自動車専用道は、速度にこだわった健常者のための仕用のものだが、今求められるのは、子ども、女性、高齢者、ハンディキャップといった弱者が、低速走行によって利用でき、美しい風景、動植物との出会い、環境への感性的体験を促す自転車道なのである。

河野昌広氏は、「車の道から歩く道、自転車の道、走る道へ——都市の困難と再生」において、道空間のさらなる新しい可能性に着目している。「車の道」から「自転車の道」や「歩く道」への転換は、都市に多様な要素をもたらすための重要な論点だが、これに加え、「走る道」に目を向けている。たとえば、皇居周辺のランニング道が提供するものは、都市を走る体験であり、走ることで「都市を体感する」ことだ。それは近隣で働くビジネスマンだけでなく、遠方からの観光客まで様々な人々を呼びこみ、都市空間の活性化に有効な多様性やアクティビティを生み出すものと期待される。

第二部「都市の創造と再生」には以下の論考が収められる。

古谷誠章氏による「建築・都市は、災厄からいかに蘇ることができるのか」は、都市の再生に関する論考である。イタリア半島に位置し、世界遺産ともなっているマテラ。石の家で構成された町として知られるが、堅牢なはずの石の町並みも人が住まなければあつという間に崩壊する。対比的なのはモンゴルの遊牧民たちの住まい方で、定住しない彼らだが、大切なものを留め置くためにウランバートルという都市をつくったという。また、

江戸から東京へと火災、地震、戦禍を生き抜いてきた東京の再生が、「記憶」の場としての都市の重要性とともに語られる。

藤井由理氏の「創造的手法としてのノテーション」は、「ノテーション」、すなわち「表記法」をめぐる、その創造性を浮かび上がらせる考察である。地図や楽譜から建築や都市まで、領域を横断し多くの例が出され、分野を超え共通した重要性が示唆されている。都市に関する表記法の歴史を辿れば、都市は、たんに空間に存在する対象の物理的な位置や特徴を記述すれば表記できるわけではないことがわかる。人々が歩き、時間的な連続のなかで得られる知覚やイメージ、体験こそが、都市を意味付け、形成していることが明らかとなる。

山村崇氏による「『小さな手つき』で実現するアートのまち——天王洲における小規模継続的整備によるエリア価値の再構築」は、東京の天王州における地域再生の実際を、詳細な調査・研究を基に示したものだ。「天王州アイル」の名で親しまれる本地区は、アート好きには、ギャラリーの街としてもすでにすっかりなじみ深い。アートの街としての「物語」は、再開発のために少しずつ紡がれた新しい「物語」であることがわかる。スクラップ・アンド・ビルドによる大規模開発とは異なる緩やかな価値の向上は、脱成長期における業務市街地再生のヒントを提供するだろう。

マーティン・グロスマン氏の「朝日の昇る国のメガシティの芸術と文化——ブラジル、サンパウロの場合」は、サンパウロに長年住み、教鞭をとってきた筆者の目を通して、都市とアートの複雑な関係を考察した論考である。サンパウロ都市圏は人口二一〇〇万人以上を抱える大都市で、GDPでは世界でもっとも有力な都市のひとつに入る。一方で、周辺部にはファヴェーラと呼ばれるスラム街が広がり、「経済的不平等」がこの都市を真に支配しているという。そこでの文化政策では、周辺にも目を向けた多様な複雑なプログラムが求められ、実際に行われたアート・イベントを例に都市へのアートの介入の可能性が考察されている。

第三部には、「都市の歴史と文化」をとりあげた論考が収められる。

宮城徳也氏による「古典古代の疫病と都市——文学作品における描写」は、ギリシア文学やラテン文学の記述から、パンデミックと都市に関し考察したものである。ホメロス、ヘシオドス、アイスキュロス、トゥキユデίδες、ルクレティウス、ウエルギリウス、オウィディウス、ソポクレス、セネカ。これらの作家や歴史家たちの著述についての詳細な検討からは、作品ごとに創作姿勢や視点は異なるものの、紀元前からすでに医療、知識、宗教を背景に、人間がいかに疫病と闘ってきたのが垣間見られる。パンデミックの歴史の長さと同時に、時代を超えて現代とかわらない普遍的問題に気付かされる。

檀山満照氏の「墓のある都市景観——秦始皇帝陵の陵園と魂の巡遊」は、古代中国において造営された「死」をめぐる都市空間についての論考である。紀元前二二一年、全土を統一し、ファースト・エンペラーとなった秦の始皇帝。その墓陵については、発見されたおびただしい数の兵馬俑で知る人も多いだろう。本論では、近年中国で国家プロジェクトとして行われているリモートセンシングによる調査をもとに、地下内部の様相を分析すると同時に、墓の造成とともに創られた「陵園」についても着目し、全貌に迫る。

鄭珉（ジョン・ミン）氏は「十八、十九世紀における朝鮮の文人知識人層による園芸趣味」において、朝鮮時代のソウルにおける何とも豊かで風流な都市生活の一面を浮き彫りにしている。当時ソウルでは、清からの文物の輸入や出版の普及によって文化活動が促され、書画・骨董等の芸術に加え、花や植物を愛好する人々が増大する。さまざまな文献に見出される園芸趣味に関する詳細な記述は、その熱狂ぶりを示すものだ。朝鮮時代の文化を幅広く研究してきた筆者は、そこに都市文化の活性化がもたらした一種の「ウエルビーイング」を見出している。

池田祥英氏は「地底都市の美しき生活——タルド『未来史の断片』を読む」において、フランスの社会学者がブリエル・タルドによるSF小説をとりあげる。初出が一八九六年にもかかわらず、その内容は、まるで現在私

たちが直面する地球環境問題やコロナといった危機を予言するように重なる要素が多いのに驚かされよう。地下都市に追い詰められた人間たちが、芸術に勤しみ再生する物語は何を意味しているのか。『模倣論』に代表される、タルドが展開した独自の社会学理論の反映が読み取られている。

第四部は、「都市の表象と美術」に関する論考で構成される。

ゲイル・レヴィン氏の「二十年後、ニューヨークの9・11に応答し制作された芸術を振り返る——ゲルハルト・リヒター、エリック・フィッシュル、中川直人、ロズ・ダイモンを通して」は、「都市と美術研究所」の一回目のシンポジウムに際しダイモン氏とともに来日・講演された内容が中心となっている。ここでは、タイトルにあげられた各アーティストたちが、9・11事件にいかに関与し、制作したかが分析される。アーティストにより、抽象、具象、絵画、彫刻、デジタルアートと、表現や手法とともに、視点や関わり方も多様で異なっていることが示されている。これらの考察を通し、忘却される運命にある悲劇に、芸術の力がなしえることは何かを問う。

坂上桂子が「ニューヨークの画家 木村利三郎——都市の表象と〈9・11〉」で取りあげるのは、一九六四年にニューヨークに渡り、生涯アメリカで制作を続けた日本人アーティストである。木村利三郎の作品は、わずかな例を除けば、タイトルはすべて「City」に番号が付けられただけであり、まさに「都市」の画家と呼ぶにふさわしい。作品の細かい分析からは、都市への賞賛が多彩に表現されつつも、他方で、テロよりもずっと以前から、都市の「崩壊」が作品のなかで繰り返し予感され暗示されていたことがみえてくる。時代に敏感に反映し予知する芸術の力を見出していく。

田中綾子氏の「荒川修作+マドリン・ギンズの都市構想『Reversible Destiny City / 天命反転都市』——プラネタリー・アーバニゼーションの時代に」は、荒川修作の都市構想について、新たな視点を見出そうとする。荒

川といえ、岐阜の「養老天命反転地」や東京・三鷹市の「天命反転住宅」で知る人も多いだろう。「死なないために」というスローガンをもって、「天命」を「反転」することをもっぱら主張してきた美術家・思想家だが、本論では、荒川の都市構想に、むしろ「人のための街」、「希望を持てる街や共同体」、「日常が芸術となる都市」といった「未来の都市像」が提案されていることを指摘する。

塚原史氏による「モダンアートの『反転』とミュージアムの変容——ダダからパンデミックへ」は、パンデミックにおいて変容した美術館の新しい姿から、モダンアートを再考したものである。コロナ禍にあって美術館はどこも長期の閉鎖を迫られ、その結果、オリジナルを現実の空間で見せる代わりに、ヴァーチャルを駆使して作品を公開するようになってきた。ここではフランスを代表する美術館が、コロナ禍において具体的にいかに対応してきたを詳しく辿り、美術館のヴァーチャル化に、「デュシャンの《泉》がオリジナル概念を超越」してきたのと同様の「反転」を見出している。

富田章氏の「東京ステーションギャラリーの戦略——都市型私立美術館の課題と限界」は、筆者がこれまで勤務し携わってきた美術館三館を例に、日本における「都市型」の私立美術館について論じたものだ。横浜のさとう美術館、大阪のサントリー美術館、東京ステーションギャラリーにおける経験は、美術館の実際を何よりもよく伝えてくる。このうちすではじめの二館は閉鎖しており、その歴史は筆者の個人的体験に留まらず、一九九一年から現在に至る、日本の美術館の発展のかたちや歩み自体とも重なる。パンデミックを経て、日本の都市における私立美術館はどうあるべきか、再考が迫られている。

以上が本書に収録された各論考である。振り返れば、本研究所の立ち上げのシンポジウムは「都市の災害とアート——9・11/3・11」（二〇一七年）をテーマとし、テロと自然災害という二つの大きな災害をテーマにはじまった。そして今、私たちは折しもパンデミックというさらなる危機にさらされることになった。研究所が

じまった頃には想定もしなかった状況下にある。環境問題、エネルギー問題、人口問題など都市の危機は止みそうにないが、都市の明るい未来へ向けての道筋を照らす光が、これらの論考からわずかでも見出せることを願うばかりである。

二〇二二年一月

都市と美術研究所所長 坂上桂子